



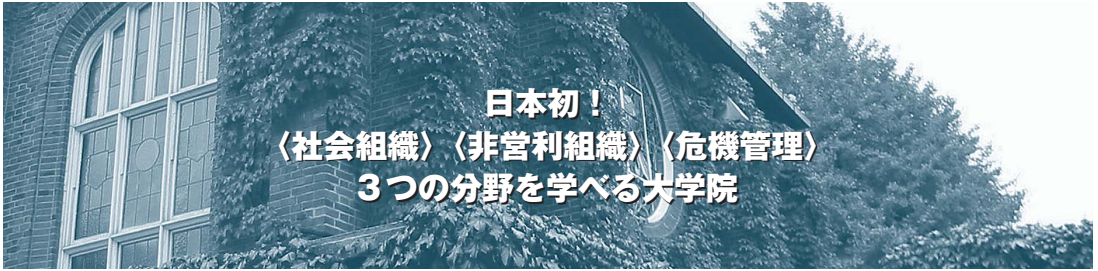
Contents

- P1 Interview 清原慶子 三鷹市長
- P2.3 2004 院生たちの活動紹介 / 院生紹介 / 修了生紹介
- P4. 日本評価学会開催 / 国際シンポジウム開催

Vol.4

発行：立教大学大学院
21世紀社会デザイン研究科
編集責任：並原清志
編集：NPO法人21世紀社会デザインセンター
取材：大学院生
発行日：2004年12月20日

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



interview

多角的な視点を持って、社会をデザインする

Q 現在取り組まれている「『あすのまち・三鷹』プロジェクト」における三鷹ネットワーク大学(仮称)に関するお話などをまじえて、市長の市政への思いをお聞かせください。

「三鷹ネットワーク大学(仮称)」の構想については、現在は推進協議会で準備をしている段階です。「民学産公」の協働という三鷹市の取り組みの特徴は、長い間「市民参加」のかたちで三鷹市が取り組んできたことの成果です。実験的試行等を経てさらに発展を図ってきましたが、その中で一歩踏み込んだ方向として集約されているのが、「三鷹ネットワーク大学(仮称)」といえるかもしれません。

私自身としては市長になる以前から第3次基本計画の素案を市民が作成するために組織された「みたか市民プラン21会議」に共同代表として参加するなど、市民の視点から政策提言に関わってきました。経営的な観点は常に持ち続けていたつもりですが、市長という立場は、さらにその経営的観点を重視しなければなりません。市民から選ばれたという立場は大変に責任の重いものです。だからこそより意識的に“市民の代表としての市長”であることを心がけています。

Q 共同代表での経験は「みたか市民プラン21会議」に参加した375人という市民をまとめていく大変な作業であったと思います。市民としての参加、市民との協働についてはどのようにお考えでしょうか？

「協働とは言うは易く行うは難し」と思います。当時の市長とのパートナーシップ協定の締結を基礎とした活動を経験したわけですが、協働はきれいごとだけではない困難を伴うものです。しかし市民が直接まちづくりに関することは、本来の意味で自治には必要なことです。また、その協働の実践によって職員は鍛えられ、職員のプロ性も高められます。市民との対等性をつくるためには、職員も意識を変える必要があります。市長が市民の代表であることを常に意識してもらうために、私は直接職員と関わる機会を極力持ち、行事や事業等には職員と共に参加することを心がけ実践しています。そうすることが職員の市民感覚の理解につながるかと考えています。

「みたか市民プラン21会議」の素案からの市民参加について、数多くの参加者のエネルギーを支えたのは、三鷹を「よいまちにしたい」という思いに他なりません。様々な人の思いがプロセスの中で共感し、共有する中で集約され、そこに「信頼」が生まれていくのです。必ず集約で

きるという経験を重ねて、協働が形となるのです。そのために必要なのは、コーディネート能力に支えられたリーダーシップです。さまざまな壁に恐れることなく挑戦する気持ちが大切です。全てが100パーセントの成功ではなくとも、過程の積み重ねがあって、一定のまとまりを作っていく素晴らしいしは大きな力を生むと思います。

計画策定者が計画の具体化という次のステップで「既得権」を持つべきでないという考えから、「みたか市民プラン21会議」は解散しました。当時のメンバーの多くは、新たな視点、新たなメンバーを加え、次の段階へ進んできています。関わった人たちは新しいINPOなどを立ち上げ、実践者や評価者としてプランの実行を支えています。このように積み重ねてきた三鷹の経験は、理論というより、実践から体得したかけがえのない市民の共有財産になっています。

Q 三鷹に他の地域が学ぶとしたらどのようなことだとお考えですか。研究科での学びについてのお考えもお聞かせください。

21世紀社会のデザインを考える上で、私たちにとっての学問の可能性は、実学として取り組みの中にあると感じています。文化や地理的特性の軸を配慮した日本型の社会科学的なアプローチをとることが、そのためには必要だと思います。社会的な検証を経ながら、学問の意義や価値を追求していくことが、現実問題の課題解決に結びつくのではないのでしょうか。21世紀社会デザイン研究科においても、実践の現場から適切な距離を持ちながらも、必ず影響を与えることのできる「学の間」であることが、社会全体への強みとなります。このことは「三鷹ネットワーク大学(仮称)」が社会課題解決に向かう創造の場として存在する意義があることにもつながっていくのだと考えています。(聞き手 岡田孝子)

清原慶子氏



三鷹市長

慶応義塾大学法学部政治学科卒業。同大学院修士課程政治学専攻終了、社会学研究科博士課程社会学専攻単位取得満期退学。

慶応義塾大学文学部非常勤講師、杏林大学医学部非常勤講師、ルーテル学院大学文学部助教授、ルーテル学院大学文学部教授、東京工科大学メディア学部教授、東京工科大学メディア学部長。2002年4月より現職。現在の主な活動：内閣府国民生活推進委員会個人情報保護部会臨時委員、内閣府障害施策推進本部参与、高度情報ネットワーク社会推進戦略本部評価専門調査委員、総務省情報通信審議会専門委員ほか。

新潟中越地震 孤立していた川口町への支援活動

2004年は台風・豪雨災害、新潟中越地震と大災害が連続した年であり、災害救援ボランティア(NPO)の重要性が改めて認識された年でもありました。私が事務局長(非常勤、無給)を務める災害救援ボランティア推進委員会(会長：石原信雄、設立1995年、会員3581名)は新潟中越地震でのボランティア活動にも積極的に関与しました。

主な活動は隣接県群馬県と協働での被災地川口町への支援活動です。具体的には11月4日より12月3日まで毎日、川口町に向けて日帰りバス(1台40名定員)を運行し、群馬県内で募集し、登録したボランティアを中心に延べ千名近くを派遣しました。被災地での活動では救援物資の仕分けに始まり、仮設トイレ定期清掃、美容・マッサージ・獣医等の専門家によるサービス、避難解除後は震源地に近い木沢地区で後片付けや農作物刈り取り、雪準備の手伝い等に汗を流しました。今回の活動は行政とNPOがパートナーシップを実現した活動として、地元では川口町に大変感謝される地元密着型活動として注目され、全国版で読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、時事通信、地域ではNHK、地元FM、群馬県主要新聞で紹介され、評価されました。

NPO、ボランティア、ネットワーク、危機管理を勉強し、実際の活動に活かそうと思う人は多様な人材がいかが研究科をおすすめします。

3期生 沢野次郎(災害救援ボランティア推進委員会事務局長、財団法人日本法制学会専務理事。研究テーマ：災害と災害ボランティア、地域防災) 指導教授：川村仁弘

「すかっ子セミナー」と 「横須賀市民の自治基本条例をつくらう会」の活動

NPO法人よこすかパートナーシップサポーターズ(YPS)は、市民活動支援を主目的とする団体で、横須賀周辺の市民活動団体のネットワークや活動支援、行政と連携する事業の支援などを行っています。

「すかっ子セミナー」は、YPSが市内の活動団体に呼びかけ、プランニングワークショップを行って作り上げ、実行委員会制で3年間継続実施している小中学生のための市民活動体験プログラムです。毎年、自然環境、福祉、国際協力など様々な分野で活動する20近くの団体が協力して、8コース前後のコースを運営し、YPSは実行委員会の事務局を担っています。受講生が指導者・まちづくり人材として成長すること、異分野の団体間のネットワーク形成を目標に、今後も継続実施していく予定です。

「横須賀市民の自治基本条例をつくらう会」は、発足してまだ1年ほどですが、市政政策研究所の研究会にNPO法人公募委員として参加したことをきっかけに、公的な研究会とは別に市民間の取り組みをはじめたものです。近隣自治体の事例報告会や勉強会、報告者や講師に市民団体関係者を交えてのフォーラム、アンケート調査などを実施し、市民案作成を目標に活動しています。研究科の分権社会システム論で学んだ地方分権、地方自治のトレンドを実践する機会となっています。

1期生 藤澤浩子(現在法政大学大学院人間社会研究科人間福祉専攻(博士後期課程)(山岡義典研究室) 研究員。特定非常勤活動法人よこすかパートナーシップサポーターズ代表理事) 指導教授：中村陽一

院 生 & 修 了 生 紹 介

Kouichi Nakamura 中村 宏一さん

私は経歴26年程のコンピュータ技術者で、ここ10年程のミッションは技術開発におけるプロジェクト管理です。その中でプロジェクト進行を阻む様々な危機要因に見舞われ、その都度経験と応用力をたよりに何とか対処してきました。近年、技術開発の現場にも、効率化、コストダウンの要求は厳しさを増しており、経験則による危機管理対処だけでは対応出来なくなるのは時間の問題だと考え本学へ入学しました。

目標とする大学院を選定するにあたり条件にしたのが、「危機管理の講座が充実していること」、「社会人枠があること」、「仕事を続けながら学ぶので通勤途中に有ること」の三点で、検索すると一発で目標が決まってしまうました。

特に!は重要で、危機管理の講座があっても1つか、多くても3つ程度、これほど沢山の講座があるのは本学のみで、大変満足しています。

本学で危機管理を学ぼうとしている人の参考に、危機管理専攻の学生からみた本学のメリットをあげると(1)危機管理の講座が充実、(2)修士の学位が取得できる、(3)MBAの資格が取得できる、(4)更にNPO/NGOの入門も学べる、(5)笠原先生の「組織論原論」を受講できる、です。

最後の講座は社会学の入門のような内容ですが、この講義を聴くだけでも本学へ入学した価値があります!?



経歴と修論テーマ

大学で電子工学を専攻。高周波機器、制御装置、そして知識処理プロセッサ等の電子回路設計を経験後、OS開発、クライアントサーバのシステム開発を経験。ここ10年程はプロジェクト管理とネットワークセキュリティの設計・構築・管理の仕事をしている。研究テーマは「技術開発行程管理における要員確保上のリスクマネジメント～技術者不足の原因究明と優良技術者の確保方法の提言をする。」

Toshiyuki Oguri 小栗 俊之さん

第1期生の小栗俊之と申します。教職員の先生方、そしてご学友の皆様、在学中は大変お世話になりました。今年の3月に修了したばかりであるというのに、とても昔のことに思われます。

38歳にして再び大学(院)に籍を置くことになるうちは思いもありませんでしたが、私にとってはとても充実した、楽しい2年間でありました。私は現在、文京学院大学にて助教授として奉職させて頂いております。これも21世紀社会デザイン研究科での2年間が評価されたからに他なりません。かような意味合いにおいても「感謝」の一言に尽きます。

さて、現況はと申しますと…もろもろございますが…。!大学院地域連携ボランティアセンターの立ち上げ。
*ボランティア論・NPO論等講義科目担当者として白羽の矢が立っていること。

#同じく第1期生の本間篤氏との「命」「健康管理」をキーワードとした研究活動及び海外留学希望学生に対する健康管理オリエンテーション(年2回)の実施などです。

特に、*のボランティア関連科目に付きましては、是非現役生の方々、OB/OGの方々に、ご自身の経験を基に、ゲストスピーカーというお立場でご協力いただけたらと考えております。ご連絡をお待ちいたしております(toguri@ba.u-bunkyo.ac.jp)。これからは、21世紀社会デザイン研究科で学んだこと、考えたことを具現化していくことが修了生にとって必要なことではないかと考えております。

最後に、立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科の益々の発展をお祈りして、近況報告とさせていただきます。



経歴と修論テーマ

新潟県出身。女子栄養大学出版部勤務の後、青年海外協力隊参加。派遣国：モルディブ共和国。職種：体育。帰国後、平成5年10月より福岡幼年体育研究所勤務：幼児体育専任講師。平成8年4月より文京女子大学非常勤講師、同大学経営学部専任講師。21世紀社会デザイン研究科修了後、文京学院大学・旧文京女子大学・人間学部保育学科助教授。体育実技、健康の科学担当。修論テーマは「環境の声を生かした新しい青年海外協力隊として」

インドネシア・フィリピン 「NGO 調査研究ツアー」 に参加して



今期、大学院の夏期休暇を利用して8月24日から9月4日の12日間、インドネシア・フィリピン両国のNGO調査研究ツアーを実施しました。

伊藤道雄先生のゼミ生を中心に参加者は5名。各人の修論テーマ及び関心領域にそった形で、インドネシアは6日間11団体、フィリピンでも6日間9団体への訪問となりました。

その中で今回訪問したLP3ES（経済社会情報教育研究所）は、アドボカシ - と開発を組み合わせた活動を展開。組織自体は宗教的に中立ですが、イスラム系のプサントレンのような伝統的組織を利用しながら技術向上や意識の近代化を図ろうとしています。

また、BINADESAでは、地元住民と協働で立ち上げた「オーガニックファーム」を訪問しました。特徴は、その地域の伝統文化や社会構造、人間関係、経済状況等を十分にリサーチ（mapping）した上で地元民中心のプロジェクトを作り上げたことです。そして化学肥料や農薬使用を中止し有機農法へと農業スタイルを転換。紫いもをポテトチップスに加工し近隣に販売し現金収入を得ることが実現したのです。

今回2週間という短期間でありながらインドネシア・フィリピンのNGOを訪問し感じたことは、自国の抱える様々な問題を解決する為にあらゆるリソースやネットワークを最大限に活用し事業を成功に導いているその活力です。地方自治体、NPO、NGO 3者やNGO、NPO同志がともに連携しトランスな運動態として、有効かつ効率的に手を結ぶ様を見聞きできたことは、知識や言葉だけでない市民社会のダイナミックな動き強く実感できた貴重な体験でした。（報告：木村真実）

現場主義！ タイ・カンボジア、 NPO 視察



今回の視察は、伊勢崎賢治先生のゼミ生などで企画、現地に行き、何かを得て帰ってくるといった一方通行ではなく、参加者の中でも様々な学びを得られるような機会を設けることを

目指したものです。参加者は、年齢も学部も専門も職業も雑多。理工学部の方も参加されました。訪問先はタイ・カンボジアで、企画と現地調整は、以前に現地駐在経験者のある院生が行いました。

視察を行ったNPOは5箇所、それぞれ、スラム街・エイズケアセンター・不発弾処理・紛争予防・母子支援・ODA支援などを行っており、どれも社会の現実と鋭く対峙しています。その中で地に足を付け、現地の人々の視線で活動するところに、NPOの原点があると改めて思いました。写真はカンボジア、ベトナム国境沿いの村で、不発弾処理の一連を視察したときのもの。熱気の中で風圧と音を感じ、村の人々の辛さを垣間見、けて忘れ忘れることの無い経験をしました。

まさに現場の現実・現状を直視する視察も、出国前からそれぞれの参加者が、仕事や得意分野からの情報提供などを積極的に行い、意見を出し合い全く無駄の無いスケジュールを作りこんだことにより可能となりました。社会人大学院生が多い故でしょう、このように“大学”との繋がりの中でつくられる様々な人々のネットワークもこの研究科の魅力となっています。（報告：金澤哲也）

院生が立ち上げたNPO



法人日本グリーンツーリズム・ ネットワークセンター

小林 勢子

【経歴と修士論文】

1980年東京理科大学理学部卒業、中学高校化学教師を経て家庭に入り、子育てのかたわら生協理事を務める。修士論文のテーマは「グリーンツーリズムという手法を使った社会システムの転換 NPOにおける実践について」

生協で食と農、食育など担当し、このままの日本では農業を担う人がいなくなってしまうのではないかと危機感がありました。この研究科で学んでいく中で、豊かに生きていける21世紀の社会をデザインしていくためには、都市も農村も力を出し合い一緒に考えていく組織が必要と感じ、先に出ていた21世紀社会デザインセンターや多くの人に支えられ今年（2004年）7月NPO法人日本グリーンツーリズム・ネットワークセンターを設立することが出来ました。

活動を続ける中で、10月には岩手県の金山町自然フォーラムinかねやま2004の基調講演の依頼を受けました。講演では、「私の願いは子供が豊かに生きられる日本、ずっと林業・農業・漁業のできる美しいままの日本でいてほしいということであり、都市住民は農山村から暮らさず、生き方、教育、歴史、文化いろいろを学びたいと熱烈なラブコールを送っていること、相互交流が必要と感じていること、それは、都市と農山村の交流のアンケートの結果に出ていること」などを話しました。農山村には自然とともに生きてきた誇りある人間の原点があるように思いました。さまざまな出会いの中で、風景以上に心の美しさ、生き方の美しさをNPOの活動を通じて多くの人に知ってもらいたいと考えています。

Dialog In the Dark

真っ暗な空間を使ったワークショップ

2005年2月26(土)～27日(日)、ミッチェル館3階で真っ暗な世界を体験するワークショップが行われます。真っ暗ですから参加者は自由に歩き回ることができません。そのために視覚障害をもつ「アテンド」(案内人)の誘導により、参加者には人工的に作った暗闇の中で日常生活を体験してもらいます。歩くこと、音を聴くこと、食べること。視覚が使えないところで体験は、障害者と健常者の関係を一瞬に逆転してしまいます。しかし、ワークショップからはそれ以上の多くの気づきが生まれるようです。

このワークショップはヨーロッパを中心に全世界70都市で開催され、今まで100万人以上が体験しています。日本でも数回行われていて、そのとき実際に体験し是非来教でも開催したいと願った院生を中心に石川治江ゼミの活動の一環で実施することとなりました。

ぜひ皆さんもご参加ください。また、同時に、作るところから一緒にこのワークショップに参加したいという人を募集しています。ご希望の方は、**DIALOG IN THE DARK Showcase@Rikkyo**事務局 did_showcase_rikkyo@yahoo.comまで、ご連絡ください。

DID

日本評価学会第5回全国大会が2004年12月4(土)、5日(日)の両日、立教大学池袋キャンパスにおいて開催されました。同学会は、国際社会に通用する評価活動の定着と評価活動に関わ

る人材の育成を推進するため、研究者や実務家の研究と交流の場として2000年9月に設立されました。設立以来、我が国における評価分野の研究・実践について、その質の向上を牽引する中心的な役割を担っています。

大会では、評価手法の部において、本研究科2年の横井秀治が「ケイパビリティ・アプローチの適用によるロジック・モデルの再構成に関する一考察」と題して発表。同じく学生インターンの部では研究科1年の茂木勇、山田孝子、山村真紀の3人が日本評価学会の「学生インターン出前サービス」事業に参加・実習した内容をもとに「『ラオスのこども』の組織運営に関する評価調査」の報告をしました。

本研究科は、開設当初から評価演習に力を入れており、特色

のひとつとなっています。「評価の理論と実践1、2」では、定量評価及び定性評価を学び、「非営利・公益法人論実習」では二次評価及び評価実習に取り組みます。いずれの演習も評価

分野の気鋭の研究者・実務者を講師に迎えており、総じて受講者から高く評価されています。また、冒頭の学生インターンへの応募も奨励されており、学会の輪旋する自治体やNPO/NGOへ直接赴き、実際に評価ケースを担当することができます。限られた時間、予算、経験のなかでの評価インターンは試行錯誤の連続ですが、実践から得られるものは大きく、実践的教育を重視する本研究科の真骨頂とも言えます。

来年度から評価に関するカリキュラムが更に充実することもあり、評価研究の環境がさらに整います。「評価研究やるなら立教」と噂される日もそう遠くはないでしょう。

(報告：茂木勇、山田孝子、山村真紀)



「評価分野における認証制度について」のセッションでは、評価士の可能性や評価研修の認証化などについて話し合われた。

国際シンポジウム

『日中大都市における防災と危機管理・両国の防災上の課題をめぐって』開催

2004年10月12日(火) 13:00から21世紀社会デザイン研究科主催の国際シンポジウム「日中大都市における防災と危機管理・両国の防災上の課題をめぐって」が開催されました。中国側コメンテータの方が「危機管理」のキーワードでWebを検索して立教大学の本科を知って今回の企画につながったとのこと。日本で初めて中国の防災関係専門家を招いてのシンポジウムとなりました。

講師は中国側が金磊北京市建築設計研究院院長、郭大慶北京市地震局副局長、日本からは上村章文内閣府政策統括官、斎藤和弥東京都総務局防災対策課長。日本側は東京都の防災体制、中国側は北京市の防災体制の話が中心となりました。急速に近代化を進めている北京市を中心とした防災計画の概要は、日本ではほとんど聞くことが出来ない話で、大変貴重な講演会となりました。

また、日本では災害に対応すべき職員の出動時間。2時間は一般的だが、中国では住居は比較的職場に近いのが一般的で、防災計画もまずそこを解決しなければならぬ日本側の事情が特徴的でした。

最後に笠原先生のコメント「日中防災体制で共通の問題点が見出せる、それは『縦割り行政の弊害である』悩みは共通」というのが印象に残りました。このようななかなか聞く機会のないシンポジウムは、ぜひその他で出席できなかった院生たちのために、TVカメラを準備し、内容を録画・後日公開するシステムの検討を願います。

(報告：中村宏一)

Schedule!

21世紀社会デザイン研究科 学年暦 2005年1月～6月		21世紀社会デザイン研究科主催 講演会/シンポジウム	2004年度
冬季休業期間	12月24日(金)～1月5日(水)	講演会「現代の戦争報道にみるメディアの現状と課題ーイラク戦争を中心に」浅井久仁臣氏(ジャーナリスト)、佐藤真紀氏(日本国際ボランティアセンターイラク担当)、伊勢崎賢治氏(本研究科教授)	7月10日(土)
修士論文・研究報告書提出期間	1月7日(金)～1月14日(金)	体験講座「NPO/NGO、危機管理の大学院体験講習会」	7月16日(金)
後期授業修了*1	1月14日(金)	講演会「21世紀・日本再生のデザインー市民知」の結集と協働のネットワークが拓く新しい社会と経済」水野誠一氏(IMA代表取締役)、石川治江氏(ケアセンターやわらざ代表理事)、加藤種男氏(アサヒビール芸術文化財団事務局長)、中村陽一氏(本研究科教授)	7月24日(土)
後期中講義	1月18日(火)～29日(土)	講演会「地域が変わる 学びの場が変わるー民学産官の協働ネットワークによるイノベーションへ向けて」清原慶子氏(三鷹市長)、佐藤芳孝氏(都立千早高等学校校長)、押見輝男氏(立教大学校長)	10月4日(月)
後期末・学年末レポート提出期間*2	1月17日(月)～22日(土)	国際シンポジウム「日中大都市における防災と危機管理ー両国の防災上の課題をめぐって」金磊氏(北京市建築設計研究院院長)、郭大慶氏(北京市地震局副局長)、上村章文氏(内閣府政策統括官付参事官)、斎藤和弥氏(東京都総務局防災対策課長)ほか	10月12日(火)
修士論文審査会、研究報告書審査会	2月1日(火)2日(水)3日(木)	シンポジウム「グローバル化と開発途上国の労働者の人権と貧困からの脱却ーフェアトレードへの道」中嶋滋氏(ILO理事)ほか	11月27日(土)
(21c社会デザイン研究科一般入試)	2月26日(土)	講演会「日本のコミュニティ・デザイナー発掘」	1月22日(土)
(21c社会デザイン研究科社会入試)	2月27日(日)	コーディネート：中村陽一氏(13:30～17:00 4339室)	
修了合格者発表	2月28日(月)		
大学院学位授与式(18:30～)	3月23日(水)		
2005年度入学式	4月5日(火)		
前期授業開始	4月11日(月)		
体育祭(全日休講)	5月25日(水)		

*1 14日(金)は月曜日授業の補講日

*2 独立研究科事務室受付分